研究報告

里山学から見た東日本大震災

―岩手県陸前高田市の事例―

里山学研究センター研究スタッフ・経済学部教授
伊達　浩憲

はじめに：「身近な二次的自然と人間とのより良い関係」を問う里山学

人間の居住空間にある身近な里山（二次林、水田、ため池、草地など）は、多様な生態系のモザイク構造をなしており、長期にわたる人びとの生業や暮らしを通じた「二次的自然と人間との相互作用」が育んだ生物多様性の豊かな場所である。

人間は、この身近な二次的自然から、さまざまな自然の恵み（生態系サービス）を「享受」してきた。享受とは、経済学の観点からは、自然が提供するさまざまな恵みを、自らが価値を置くさまざまな「良き生（well-being、生きかたや在りよう）」に「変換」することと言い換えられる。そして、この変換のためには、能力と社会的条件（整備）とが必要である。

1．震災前の陸前高田市の水辺環境と良き生

広田湾沿岸の水辺環境（岩礁、藻場、砂浜、海岸林、潟湖、干潟、河川など）は「エコトーン」と呼ばれる水陸移行帯であり、多様な生きものの生息地であった。「高田松原」の名で市民に愛されてきた全長２km、７万本ものマツ林は、江戸時代に防潮林・防砂林として植えられた海岸林だった。このマツ林の内陸側には県内最大の湖沼「古川沼」があり、淡水と海水とが混じり合う汽水域の潟湖で、さまざまな魚類、貝類、ヨシや海浜植物などが生息していた。

人びとは、この場所で、さまざまな自然の恵みを享受し「良き生」に変換してきた。例えば、白砂青松の中で愛犬と散歩をする、波の静かな砂浜海岸で子どもと海水浴をする、干潟で家族そろって潮干狩りをする、川で友達と魚とり遊びをする、などがあげられる。

2．津波と地盤沈下による甚大な被害

2011年３月11日の津波は、死者1,557人、行方不明者202人という甚大な被害を陸前高田市にもたらした。人びとは、大切な家族や友人を喪い、悲しみや苦しみを抱えて生きることを余儀なくされた。住居や学校、仕事場も浸水し全壊した。生態系も、地震による地盤沈下と猛烈な津波によって壊滅的な影響を受けた。高田松原は全滅し、古川沼は水没した。生態学では津波は大規模な「自然攪乱」の一つとみなされるが、今回の津波では、コンクリート塊や鉄筋片、瓦礫、自動車、船舶用重油などが湾内や沿岸域に大量に流出する「人為的攪乱」が発生した。

3．復旧・復興工事による人為的改変

震災後の復旧・復興工事も、生態系に深刻な影響を与えた。防潮堤、河口堰、潟湖や河川の護岸、宅地造成などの大規模な土木工事によって、森や川、沿岸エコトーンの人為的改変が行われ、海と陸との生態系のつながりは分断された。地盤沈下した高田松原の砂浜海岸を「復

旧」するために、山土（マサ土）を使用した盛り土工事が行われた。また、全滅した市街地を再建するために、森林を伐採し山を切削して高台の宅地を造成し、その土砂をベルトコンベアで津波浸水地に運んで嵩上げ地を造成する大規模工事が行われた。そのため、仮設住宅での不自由な暮らしも長く続くことになった。復旧・復興工事は、自然の恵みの劣化、その恵みを享受する人間の能力の減退、生きかた・在りようの幅の縮減をもたらしたと言える。

4．場所に埋め込まれた喪失と悲嘆

人びとが自然の恵みを享受してきた場所は、津波被害によって、大切なひとを喪った「場所」となってしまった。「震災後、周囲の風景がモノクロ一色のように見えた」と語る被災者もいる。津波と復旧・復興工事とがもたらした環境激変によって、「場所」に関する記憶と現実との断絶に戸惑う被災者は多い。古川沼では、家族からの強い要望を受けて、行方不明者の捜索活動が続けられてきた。「場所」に埋め込まれた喪失と悲嘆は、自然の恵みを享受する人間の能力の回復を妨げているのかもしれない。

おわりに：自然の恵みを享受する能力の再生に向けて

大規模工事がようやく一段落した2019年、（古川沼に注ぐ）「川原川」では、住民主催で生きもの観察会が行われた。また、小学校でも、市立博物館の学芸員が講師となって、川原川での水生生物の観察調査が行われた。子どもたちは、川底の石を持ち上げ、川の水質の指標生物のカワゲラやトビケラなどが生息していることを「発見」した。自然体験や環境学習は、「場所」の自然の恵みを享受する能力の再生や、自然の恵みの再生にとって重要であろう。同市の震災復興計画は「喪の作業」の渦中に大急ぎで策定せざるをえなかったが、そこに十分描き込むことのできなかった《身近な自然の恵みを未来に継承するまちづくり》の礎となっていくことを期待したい。

「場所」に埋め込まれた喪失と悲嘆、人為的攪乱や人為的改変によって変貌した「場所」。「場所」の自然の恵みの再生、その恵みを享受する能力の再生。どれも複雑で困難な問題だが、里山学の視座から受けとめ、問い続けていきたい。